

2013.8.22

vol.26

シネマ・ド・リぶらの
コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

次回(第27回)上映会のご案内

ローマの休日



今もなお世界中の女性たちの憧れとなっている名女優オードリー・ヘップバーンの代表作。アカデミー賞では主演女優賞、衣装デザイン賞、脚本賞を受賞した。ローマの名だたる名所が定番スポット化したり、ヘップバーンが着ていたジバンシィの衣装が全世界的に流行するなど、多くのムーブメントを生み出した。

監督：ウィリアム・ワイラー

原題：ROMAN HOLIDAY

出演：オードリー・ヘップバーン
グレゴリー・ペック

製作：1953年 アメリカ

上映時間：118分

ヨーロッパ各国を親善旅行中のアン王女(A.ヘップバーン)は、公務に追われ疲れきっていた。そしてついに滞在中のホテルを抜け出してしまう。従者もなくひとりでローマの街を楽しむアンだったが、侍医から無理に処方された睡眠薬が効き始め、ベンチで眠り込んでしまう。そんな彼女を介抱したのが、しがいないアメリカ人新聞記者のジョー・ブラッドレー(G.ペック)だった。彼女の正体を知ったジョーは、大スクープをものにしよう彼女を連れ回すのだが……。

< <http://asa10.eiga.com> >

★日時 **10月17日(木)**

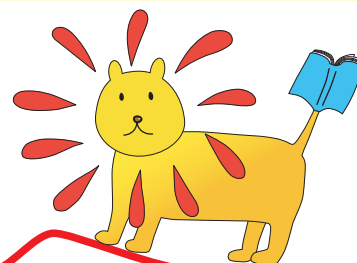
① **10:30 ~** 開場：10:00

② **14:00 ~** 開場：13:30

★場所 **りぶらホール**

★定員 **各回280人** (全席自由)

★主催 **岡崎市立中央図書館
りぶらサポータークラブ**



りぶらいおん©LSC

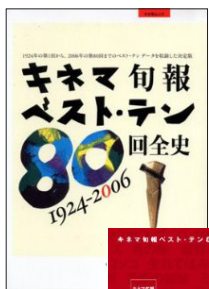
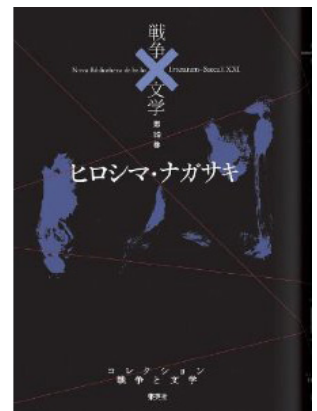
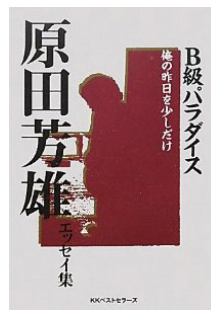
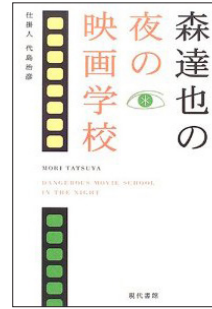
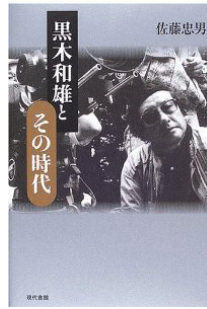
映画を読む 『父と暮せば』

監督	『黒木和雄とその時代』	佐藤 忠男	現代書館	778.21
	『私の戦争』	黒木 和雄	岩波書店	778.21
	『森達也の夜の映画学校』	森 達也	現代書館	778.21
	『TOMMORROW 明日』	黒木 和雄／監督	ブロードウェイ	778.21
	『美しい夏キリシマ』	黒木 和雄／監督	東芝エンタテインメント	778.21
映画	『キネマ旬報ベストテン 80 回史』 1924-2006		キネマ旬報社	778.2
	『キネマ旬報ベストテン 85 回史』 1924-2011		キネマ旬報社	778.2
原作	『父と暮せば』	井上 ひさし	新潮社	912.6
原作者 と映画	『井上ひさしの読書眼鏡』	井上 ひさし	中央公論新社	019.9
	『井上ひさし』 総特集	KAWADE 夢ムック	河出書房新社	910.268
	『映画をたずねて』	井上 ひさし	筑摩書房	778.21
	『キネマの天地』	井上 ひさし	文芸春秋	912.6
戦争	『戦争と文学 19 ヒロシマ・ナガサキ』	浅田 次郎／編集委員	集英社	918.6
	『映画で考える戦争』	奥田 継夫	ポプラ社	778.2
	『はだしのゲン』 1～10 巻	中沢 啓治	汐文社	726.1
	『はだしのゲン自伝』	中沢 啓治	教育史料出版会	726.101
宮沢りえ	『女性に必要な 12 の力』 「声に出してほめたい」人と話してわかった	齋藤 孝	アシェット婦人画報社	281.04
	『この人にトキメキっ! 演じる』	NHK「生活ほっとモーニング」制作班／編	同友館	770.4
原田芳雄	『B 級パラダイス』 俺の昨日を少しだけ	原田 芳雄	ベストセラーズ	772.1
	『君よ憤怒の河を渉れ』	佐藤 純彌／監督	角川映画	778.21

『父と暮せば』
フィルムデータ

製作年：2004 年
製作国：日本
仕 様：カラー
時 間：99 分

スタッフ：
監督・脚本：黒木和雄
原作：井上ひさし
出演：宮沢りえ、原田芳雄、浅野忠信



二つの疑問 K.M.

私自身はこの作品についてはあまり予備知識がなく、反戦・反原爆映画ということで、暗く重い映画かもと、若干身構えて下見をしたのですが、予想に反して、ヒロシマの悲劇と生命の尊さを、時に激しく、時にユーモラスな父娘の交流を通して描いている、胸の中にしっかりと沁みこんでくるいい映画でした。

ただ、映画らしいダイナミズムを捨て去り、シンプルなセットをバックに、物語のほとんどは主人公の宮沢りえと、その父役の原田芳雄の会話で進行する、「舞台の空気感」を強く意識した演出に幾つか疑問が残りました。

一つは、既に監督として確固とした地位を築きあげた74歳の黒木監督が、ライフワークであろう「戦争レクイエム三部作」の完結編として、何故多数回の公演によって玉成され、完成品ともいえる井上ひさしの代表戯曲『父と暮せば』の映画化を選択したのか？

また、この作品の最後、宮沢りえがほほ笑みながら「おとつたん、ありがとありました。」とつぶやくラストカットの後、カメラを「家屋」の天井に回し込んでいって最後に見せたあの「景色」。黒木監督はあのラストシーンにどういう意図を潜ませていたのか？

一つ目の疑問には、2004年に北京で開かれた「日本映画祭 2004」に出席した黒木監督が、インタビューの中で「敗戦の年の5月、中学時代のことでした。動員先の軍需工場で、米軍機の爆撃を受けて、11人の友人がほとんど即死状態で亡くなりました。あまりのむごさにショックを受けた私は、とっさにその場を逃げ出した。助けることもできないし、無我夢中で防空壕にかけこんで、震えていました。卑怯にも友人を見捨ててしまったんです。それが生涯のトラウマになりましてね。僕の映画のもとになっているのです……。『父と暮せば』を作ったのには、いくつかの訳があります。個人的な戦争体験があったこと。生き残ったことを後ろめたさと思い、それを背負って生きていくヒロインの肖像にとっても共感できたこと。そして前作の『美しい夏キリシマ』を撮ったすぐ後に、中学時代の友人がガンで急死したこと……。」と触れていました。

詳しくは「北京便り『父と暮せば』黒木和雄監督インタビュー - 東方書店 (<http://www.toho-shoten.co.jp/beijing/bj200410.html>)」をご参照ください。

もう一つの疑問ですが、私自身は監督はかなり重要な意図を持ってあのラストシーンを挿入したに違いないと思うので、この点についても調べてみましたが、同じ疑問を指摘するレビューは見つかりましたが、黒木監督自身の意図に関する情報は見つかりませんでした。

井上ひさし著「父と暮せば」新潮文庫より au

主人公の美津江が、原子爆弾ですべての身寄りを失って、「自分だけが生き残って申し訳ない、ましてや自分が幸せになってもは申し訳ない。」と考えている。この様に、自分の恋を禁じていた彼女が、ふっと恋に落ちてしまう。この時から、彼女は「幸せになつてはいけぬ」と云う考えと「この恋で幸せになりたい」と云う二つの考えに心が揺れ動いてしまう。

作者井上ひさし氏は、この戯曲「父と暮せば」を劇場で上演するにあたって、舞台上で一人の女優が、二役を演じることが難しいので、亡くなった父親に「幸せになりたいと願う娘」の役を演じさせ、対立する心の動きをうまく表現している。

『禁じられた遊び』(7/18 上映)

- とっても感動しました。二人の子供の純粋な気持ちに心が洗われる思いでした。
- これからどうなったのか見たい気もします。
- とても感動しました。次からも、ステキな映画を期待しています。
- 悲しい映画やねエ。
- テレビで何度か見たけれど、ホールで見るのがやはりイイ。
- 60歳になってから見るのは又ひとつ違う思いでみました。戦争はいやです。



赤のシールは午前の部、青のシールは午後の部。

「オードリー・ヘプバーンが輝いていたワケ」

(8/8 映画講座 講師：小島一宏氏)

会議室 103 13:30 ~ 15:00

参加者 30名 スタッフ 5名

ドキュメンタリーなどの映像も含め、数々の映像資料とともにO.ヘプバーンの魅力を語っていただきました。次回の『ローマの休日』を、大きな画面で見るのが大変楽しみです。

年間 2,000 円 (1 口) で、
シネマの賛助サポーターになろう!!
いつなるの？

今でしょ!

登録は市民活動センターへ!

皆様の投稿をお待ちしています! 市民活動コーナー入り口のメールボックスに入れてください。